鬼怒川の洪水流下量を調節する大堰堤工事

內務省の直轄工事貯水池容量約5,500立方米

鬼怒川は利根川の一大支川にして、源を栃木縣鹽谷郡鬼怒沼に發し、茨城、千葉兩縣の境に於て利根川に注いでゐる。

栃木縣管內に於ては、洪水の勢急に、其流量亦大なる爲、下流兩縣に及ぼす水害の損失額は大正十一年の調査に依るも、年平均180萬圓に達するの狀態である。本川の改修は大正五年度より其調査に着手し、從來の河川改修工事と大に其面目を異にした計劃が立てられるに至つた。

卽ち鬼怒川改修の根本方針として、水源地より下流に排疎する高水流量を現狀以上に絕對に增大せしめざるもので、之が爲には先づ改修區域の河道外氾濫地に代つて、洪水量の調節を爲し、其流量を低減する爲、男鹿川海跡の河袋に一大貯水池、容量約5,500立方米を築設し、大雨の際水源より流下し來る洪水を池中に停滯せしめ、排水門を設けて、徐々に之を排疏し、依て改修區域上端に於ける最大流量5,000立方米を4,000立方米に低減し、之より以下は現在の河道の調節作用により、高水流量を次第に低減せしめ、流末旣改修部に至りて、每秒2,500立方米に止むる方法である。

貯水池に築造する堰堤の位置は、男鹿川の五十里(イカリ)、湯西の合流點の僅下流にして、下野電氣鐵道の終端新藤原驛より約10粁の鬼怒川沿線、會津西街道沿に在る。

男鹿川は約160方粁の流域を有し、合流點附近は河道廣濶なる湖盆狀を形成し、今より約二百年以前に於ては、一時的乍ら數十年間一大湖を成せし處で、今日尙ほ海跡の名稱を存する所以である。

此所に築造せらるゝ堰堤は、混凝土作りの重力式で、高170米であるが、我國河川改修工事としては特種の使命を有するものなる故、內務省の直轄工事として施工せらるゝものである。

堰堤の位置は、貯水量の關係から現在の處に決められたのであるが、河底に轉石があり20米も下でないと自然の岩盤に達しないので根掘は頗る困難な工事である。

目下の工事狀況は、堰堤工事用動力として、1,000キロワットの發電所を建設され、之が六月竣工した。此は海跡の合流點附近から200個　水を取入、80尺の落差で發電してゐる。其他工事用の運搬路等も殆んど完成したので、近く堰堤本工事も盛になる事と思はれる。

尙ほ本堰堤に依る貯水池完成後は、夏季平時には內部の水を枯渴して置いて、大雨一度來れば直に之に貯溜するのであるから、1,000立方米の洪水を約15時間貯へ得る事となる。

冬季は常に滿水して置いても差支へないのであるから、若し之を渴水に苦む水力發電にでも流用すれば、非常な便利である。

何れにしても、本堰堤竣工後の活用は國家的に大に注目さるゝものである。

因に鬼怒川改　工事豫算は14,500,000圓にして、昭和元年より昭和十四年度に及ぶ大工事である。堰堤工事の主任は內務技師池田信氏である。

視察の順路は日光線の下今市驛にて下野電鐵に乘換へ、新藤原驛に下車、現場まで乘合自働車が通じてゐる。